二〇一〇年度大学入試センター試験　解説〈古典〉

第3問　古文　『恋路ゆかしき大将』

［通　釈］

未明になるにつれて、ますます激しく吹いている風の中を、（恋路大将は）たいそう早くから宮中へ参上なさった。「昨夜は中宮がお泊まりだったが、（中宮が）お帰りになるとすぐに、帝は藤壺においでになった」と（帝の近くに仕える者が）申し上げるので、（大将が）そちらのほう［＝藤壺］へ参上なさると、（風のために）立て蔀などが（倒れて）、どこもかしこも丸見えで、いつもとは違って見渡されて、姫宮の御部屋の方の小さな中庭の草むらには、（宮達の近くに仕える）子供達が下りて、皆それぞれ手に虫かごを持っている。（それを）御覧になろうとして、二宮が（仕える者に）御簾を高く持ち上げさせなさっているが、（そのそばで）十一、二才ほどであろうかと見える御背たけで、うつむいて立っていらっしゃるので前へなびくように掛かっている御髪の切った端がふさふさとして、絵に描いたかのような感じがして、目もと・ひたい・髪の様子があの雪の朝（の藤壺女御）を彷彿とさせる御顔かたちであるけれども、やはり（どこか）様子が違っていて気高く、つややかな美しさもまばゆいほどの輝くような雰囲気もまたとないほど素晴らしい御様子（をしていらっしゃるの）は姫宮でいらっしゃるようだ。どのようなことにも騒ぐことなく落ち着いている（大将の）御心も、まさにこの瞬間にはどうであろうか（落ち着いてはいられまい）、心底気持ちが騒いで、（姫宮の魅力に）ついついはっとさせられなさる。（常々）ぼんやりとしてなんとなく憂鬱で落ち着かない自分の心は、この（姫宮の）御姿などを朝夕拝見するようなことで慰めることができるだろうよ（と大将は思う）、そうかといって現在（の姫宮）は、普通の場合のように愛情を寄せてよい御歳頃ではないけれど、（せめてもと大将が姫宮を）ひたすら見つめ申し上げたく思っていると、（姫宮が）「ああ、人形の家に（秋の）虫がいてほしいわ、（人形と秋の虫と）一緒にいたら、どれほど嬉しいことだろう」とおっしゃる。すると、二宮が、「ああ（それだけでは）よくないなあ。（趣深く）苔や露もお入れになったら、人形のために、どれほど可愛らしいことだろう」と笑い申し上げなさるので、本当に（そうだ）とお思いになっている様子で、真面目な顔をなさっている（姫宮の）御目もとは、（それを）見る自分［＝大将］も自然にちょっと微笑まれて、何千年見つめていてもこれで十分見たと思える時もなさそうだ［＝いつまでも見ていたい］が、年配の女房が参上して（御簾を）もとのように引き下ろしてしまったので、（大将は）残念に思って歩いて通り過ぎなさる。（その時大将が詠んだ歌は）

宮城野に…＝宮城野に咲くまだ若々しい女郎花を移し植えて見てみたい。私の家の庭に。（宮中にいる若く美しい姫宮を妻として迎えとりたい。我が邸へ。）

（大将が藤壺へ）参上なさったところ、（帝は）一晩中吹いた風に萎れた前栽［＝庭の植え込み］を御覧になって、縁側のほうに出ていらっしゃる。藤壺女御は、たいそう薄い色の蘇芳の衣に吾亦紅の柄の織り込まれた衣を重ねてお召しになっている御様子が、さきほどの（姫宮の）御姿がふと思い出されるのも、心ひかれる気持ちがするけれども、（大将は）格別（藤壺女御の方には）目をやり申し上げない様子である。（大将は）朝顔の枝を持っていらっしゃったのを、帝に差し上げなさる。（その時大将が詠んだ歌は）

朝顔の…＝朝顔は毎朝露を受けて（次々に花を）開くので、秋には永久に咲いている花だと見ることですよ。（帝の御代も永久に栄えますように。）

帝は、「おのづから栄を為す［※（注８）に引かれている白居易の漢詩の大意＝松の樹は樹齢千年だがそれでも最後には朽ち果てる　朝顔の花は一日しか咲かないがそれはそれなりに美しく花開くものだ］」と口ずさみなさって、（帝が詠んだ歌は）

千年経る…＝千年を生きる松にたとえる朝顔の花盛りの美しさは本当に永久のものであるよ。（あなたの朝の顔も盛りを迎えて本当に美しい。）

大将は、先日の（姫宮の）面影が我が身を去らない［＝忘れられない］ままに、奈良に細かな細工（をする者）があるそうだと（聞いて）、（細工師を）呼び集めなさっ（て作らせ）たので、（姫宮が望んだように）虫も人形も一緒にして（露に）濡れても問題がないように整えさせなさっている人形の家の様子も、（そのことに尽くした大将の）限りない御心の様子も。どこまでもめったにないほどに見事である。人形をたくさん人に作らせて（その人形の家に）置きなさって、藤壺女御に差し上げなさる。「思いがけずある人が下さっていましたのを、差し上げるのによいお方もあるだろうかと思って（持って参りました）。帝にもお見せになってくださいませ」とおっしゃって、「大納言の君［＝藤壺女御の侍女］へ」と上書きして差し上げなさる。（その時）何かの端に、（大将が書き付けた歌は）

松虫の…＝（千年の樹齢を持つ「松」の字を冠する）松虫はその千年（の栄え）を約束する証があらわれて豪華な建物［＝人形の家］に住まいしている。（この贈り物を差し上げる、華やかな宮中に住まう姫宮も永久に栄えますように。）

帝もこちらの藤壺で、（大将が差し上げた人形の家を）おもしろがっていらっしゃると、中納言の乳母［＝姫宮の養育係］が、「これ［＝大将が献上した人形の家］は、強い風が吹いた翌朝に（姫宮が）欲しがりなさったものでございます。『（風のために）そこら中丸見えでございました時に、二宮が御簾を持ち上げさせなさったので、（大将が姫宮を）じっと覗いて立っていらっしゃった』と、あとで人が申しましたのは、本当だったのですねえ」と申し上げると、帝は、たいそうおもしろく、並々ではないことにお思いになられて、にっこりと微笑みなさる。「そうは言っても（大将が姫宮のことを）世間並みで何の驚かされることもない女の数のうちに思うこともあるまいが（それにしても大将が姫宮を見そめたとは意外である）。何とかして（大将の）恋心を動かしてやろうと（計画を）して、全く（こちらの）思い通りにならなかった（大将とそれらの）女性たちとの関係も残念であるが、この姫宮をそれほどにも慕い思い申し上げるとかいうのはおもしろいことだ」とお思いになられるとは、（帝も）珍しい御性質である。御返歌を、帝が（お詠みになる）、

雲居なる…＝宮中に住む千年栄える（ようにとあなたが詠んだ）松虫は住まうことになるだろう。あなたが磨き上げた豪華な（人形の）家に。（今は宮中に住まう姫宮は、あなたの邸に住まうことになるだろう。）

こともあろうに、早々と、遠回しな言い方ではあるが（大将と姫宮が結ばれることへの）お祝いの言葉であるよ。（その返歌を）待ち受けて御覧になる（大将の）御気持ちは、顔はちょっと赤らんで、（帝から大切に扱われたことで）ますます自分の身のほどが自慢げに思われ、帝のお引き立て・御愛情を、この現世かぎりのものではない［＝前世からの因縁により来世にまでも渡るものである］と思い続けなさる。

（大将は）自分の御殿である三条院の並一通りの寝殿ではなくて、格別に磨き上げて造りなさった（寝殿の）西に面した部屋で、九間ほどの所に、人形の家を作り続けて、宮中の様子や、古くからの名所の数々も、（本物と）変わることなくそっくりに作らせなさろうとして、見取り図や何やと、このこと［＝人形の家を作ること］以外のことは目に入らぬ様子で（人形の家を）整え置かせなさるので、「何事か」と（大将の周囲の人々は互いに）つつき合って、面倒なことと思い申し上げていた。（大将）御自身の御気持ちとしても、「（どうしてこのようなことをしてしまうのかはっきりせず）知らず知らずの内にしてしまうことであるよ」とおもしろくお思いになる。

我ながら…＝我ながらどうしようもないことだなあと思うのだよ。野にいる虫にまで住まいを占領させるとは。

一方で（自分の行為を）馬鹿馬鹿しく（お思いになりつつ）、このようなつまらないことをしておきなさるのも、（姫宮への思いで）上の空になりながらも（姫宮に）よく見られようとする気配りなのである。その年も暮れた。

［解　説］

問1　語句の解釈の問題。

(ア)　**基本**　「ただ／まぼり／奉ら／まほしき／に（接続助詞）」と単語分けされる。**「まぼる（まもる）」**（「まもり」は連用形）は、「見つめる」の意を表す必修単語。**「奉る」**（「奉ら」は未然形）は、ここでは謙譲の補助動詞であるので「～申し上げる」と訳す。①・②は謙譲語の訳になっていない。**「まほし」**（「まほしき」は連体形）は、「～したい」と訳す、希望の意を表す助動詞。よって、三箇所いずれもが正しい④が正解。

(イ)　**基本**　「まめだち／給へ（尊敬の補助動詞）／る（存続の助動詞「り」の連体形）／御まみ／の／わたり」と単語分けされる。**「まめだつ」**（「まめだち」は連用形）は、「真面目にふるまう・本気になる」の意の動詞。「まめだつ」は知らなくても、「真面目だ・誠実だ」の意の形容動詞**「まめなり」**は必修単語であるから、「まめだつ」の意味もそこから推測したい。「給へ」の尊敬の意味については①・②・③・⑤は訳出されているが、④は欠けている。**「まみ（目見）」**は「目つき」または「目もと」の意、**「わたり」**は「辺り」の意であるから、「御まみのわたり」で「御目もとの辺り」の意で

あることになる。よって、「まめだつ」「給ふ」「御まみのわたり」の三点が正しい③が正解。

(ウ) **やや難**　「つきしろひ／煩ひ／聞こえ／けり（過去の助動詞「けり」の終止形）」と単語分けされる。「～しろふ」（「しろひ」は連用形）は、他の動詞に補助的に付いて「互いに～し合う」の意を表す動詞。ここでは「つく」を補助しているのであるから、「つつきあう」の意であることになる。「つく」はややわかりにくいが②の「つつく」以外、「つく」という語感が生きている選択肢がない。**「煩ふ」**（「煩ひ」は連用形）は、現在と同様に「苦しむ・病む」の意。**「聞こゆ」**（「聞こえ」は連用形）は、ここでは謙譲語の補助動詞であるので「～申し上げる」と訳す。③・④は謙譲の要素が欠如している。よって、三箇所いずれもが正しいと思われる②が正解。

正解　(ア) 21　④　(イ) 22　③　(ウ) 23　②　（各5点）

問2　基本　文法（「なり」の識別）の問題。

まず、「なり」の識別について大まかにまとめておく。

「なり」の識別

① **動詞「なる」**（成る・鳴る　など）

※動作を表す意味を含んでいる。

※活用語に接続する場合は、**連用形**に接続する。

例　大人になる・鐘がなる

例　美しくなる

② **ナリ活用の形容動詞の語尾**

※一語の形容動詞として覚えておく。

例　あはれなり

※ナリ活用の形容動詞は直前に**「いと」を置いても意味が通ずる。**

例　いと大きなり（とても大きい）→「大きなり」は形容動詞。

いと男なり（×とても男だ）　→「男なり」は形容動詞ではない（名詞「男」＋断定の助動詞「なり」）。

※**「～かなり・～げなり」**となっている語は一語の形容動詞。

例　はるかなり・かなしげなり

③ **断定（～だ・～である）の助動詞「なり」**

※体言・活用語の連体形（本活用と補助活用がある場合は本活用のほう）・助詞等に接続する。

例　わが兄なり（「兄」が体言）・学問をするなり（「する」はサ変動詞「す」の連体形）・美しきなり（「美しき」は形容詞「美し」の連体形［本活用］）・人多くあればなり（「ば」は接続助詞）

④　伝聞（～そうだ）・推定（～ようだ）の助動詞「なり」

※活用語の終止形に接続する。ただし、ラ変型活用語・形容詞型活用語・形容動詞型活用語・助動詞「ず」には連体形（本活用と補助活用がある場合は補助活用のほう）に接続する。

例　学問をすなり（「す」はサ変動詞「す」の終止形）・美しかるなり（「美しかる」は形容詞「美し」の連体形［補助活用］）

※「あ（ん）なり」「な（ん）なり」のように、撥音便の下にあるものは伝聞・推定である。

これに従って考えると、aの「なる」は「暁方（未明・明け方）になる」という文意から考えて「なる」に「～に成る」の意があることがわかるので、四段活用動詞「成る」である。また、bの「なる」は体言「面影」に接続しているので、断定の助動詞である。aとbがいずれも正しいのは①だけであるから、c・dを解くまでもなく正解は①であることがわかる。「なり」の識別問題としては、非常に基本的な知識だけで正解できる易しい問題であると言える。

さてちなみに、cの「なれ」を含む「あんなれ」は、ラ変動詞「あり」の連体形「ある」が撥音便化した「あん」に助動詞「なり」が接続した状態である。ラ変動詞に助動詞「なり」が接続する場合は、断定の「なり」も連体形に接続し（もともと連体形に接続する性質があるから）、伝聞・推定の「なり」も連体形に接続する（ラ変型活用語に接続する場合は連体形に接続するから）ので、識別がしにくいが、**撥音便化した語に接続している助動詞「なり」は必ず伝聞・推定の助動詞であるので**、これを知っておくと、「あんなり」の「なり」が伝聞・推定の助動詞であることは即座にわかる。また、dの「なる」を含む「**そぞろなり**」（「そぞろなる」は連体形）は、「思いがけない・むやみやたらだ」などと訳す必修の形容動詞。「**すずろなり**」で覚えた受験生もいるだろう。「そぞろなり」で一語の形容動詞であることがわかるべき単語であるから、「なる」はその一部（語尾）ということになる。

正解　24　①　（6点）

問3　標準　理由を問う問題。

傍線部にある「**興あり**」は「おもしろい」、「**えならず**」は「何とも言えないほど素晴らしい・並々でない」、「**～入る**」は「すっかり～する・中へ～

する」の意であるから、傍線部は「帝は、たいそうおもしろく、並々ではないことにお思いになられて、にっこりと微笑みなさる」といった意味であることになる。まずこの内容からして、①の「情けなく意外に思った」がここにはふさわしくない説明であることがわかる。

また、傍線部の直後にある「さりとも～おもしろきこと」に注目したい。これは、「そうは言っても（大将が姫宮のことを）世間並みで何の驚かされることもない女の数のうちに思うこともあるまいが。何とかして（大将の）恋心を動かしてやろうとして、全く思い通りにならなかった（大将と）女性たちとの関係も残念であるが、この姫宮をそれほどにも慕い思い申し上げるとかいうのはおもしろいことだ」といった意味で、大将が姫宮を見そめたことについての帝の感想である。この部分を厳密に訳すのは難しいかもしれないが、ここから「大将は心を動かすことが少ない」（このことは本文六行目「よろづのことに騒がず鎮まる御心」からもわかる）ということや、帝が「大将が姫宮を見そめたというのはおもしろい」と思っていることを読み取れれば、正解はそれらを踏まえている③であることがわかる。

なお、②の「数多い娘の中でも目立たない」は、本文に書かれていない内容。④の「計画が思い通りに運んだ」は、大将が姫宮を見ることになったのが偶然のことであって帝の計画によるものではないから誤り。⑤の「姫宮が恋路大将にあこがれの思いを抱いている」は、大将が姫宮に思いを寄せているのだから、主体が誤っていることになる。誤った思い込みで内容を読んでいた受験生は、通釈を参考として傍線部前後の内容を確認してほしい。

正解　25　③　（8点）

問4　難　和歌の表現や内容を問う問題。

六首もの和歌の内容を問う難しい問題であるが、一首一首の和歌の意味に迫る前に、本文全体として、大将が姫宮を見そめて心ひかれており、問3で見たように、帝もそのことをおもしろく思っている、ということを把握しておきたい。

このことを踏まえて選択肢の説明を見ると、①の「恋路大将の、姫宮を宮中から我が邸に迎えとりたいという願望」、②の「帝への祝意・その［＝大将の］美しさを讃えている」、③の「姫宮が栄えるようにという恋路大将の気持ち」、④の「恋路の大将の願望が受け入れられた」は、右で確認した本文全体の主旨と矛盾しそうにないが、⑤の「身分の高い姫宮を『雛屋』のような小さな邸に迎えることについてふがいなく思う」だけは、他の選択肢に見えている内容と違っていて、ここでの大将の気持ちとしては弱々しくてふさわしくないことがわかる。

また、Eの歌で帝が大将の邸を「玉の台（※注10　豪華な建物）」と表現していることからもわかるように、大将ほどの人物の邸が「『雛屋（人形の家）』のような小さな邸」であると言うのはたとえ本人の謙遜が入っているにしても言い過ぎの感がある。実際、最終段落を見ると、雛屋を飾り付けるためだけに、「御殿の三条院のおほかたの寝殿にはあらで、また磨き造らるる西面に、九間ばかりなる所（三条院の並一通りの寝殿ではなくて、格

別に磨き上げて造りなさった寝殿の西に面した部屋で、九間ほどの所）」を準備するなど、たいへん豪華であるから、「『雛屋』のような小さな邸」という表現は、本文内容と矛盾する。

よって、正解（適当でないもの）は⑤。各選択肢で説明されている表現（たとえ・掛詞）が確かに成立しているのかどうかを一首一首確認していると、この設問を解くだけで長い時間を費やすことになってしまうだろう。最初に確認した本文全体の主旨を踏まえ、「そういうたとえはあってもおかしくないだろう」という程度の判断でスピーディーに選択肢全体を見渡して行かないと、かえって正解を絞り込むことが難しくなってしまう問題である。

正解　26　⑤　（7点）

問5　標準　心情を問う問題。

問3と問4で見たように、大将は心を動かすことが少ない人物であるが、姫宮には心を動かされた、ということを把握しておきたい。これを把握できていれば、各選択肢の冒頭の表現の中でその主旨に矛盾しないのは、①の「恋の思いに動かされることもなかった心」だけであるとわかる。

本文には「上の空にもの憂く浮きたつ心」（本文七行目）といった表現があるが、これは常日頃の大将の晴れ晴れとしない心のことを言っているのであって、恋愛における心情を言っているものではない。大将は「よろづのことに騒がず鎮まる御心」（本文六行目）の持ち主であり、帝が「いかで心動かさするわざせん（何とかして大将の心を動かしてやろう）」と図っても、「なべてかなはぬ世も怨めしき（全く思い通りにならなかった大将と女性たちとの関係も残念である）」（傍線部Xの次の行）といった結果しか得られないのである。よって、②の冒頭「恋にあこがれて落ち着かずうわついていた心」と、③の冒頭「恋の思いに漠然と浮かれていた心」は誤りである。なお、③は「許されない恋に苦しめられ・罪悪感を抱き・帝に申し訳ない」も誤り。傍線部Xの前後の内容やEの和歌によると、帝は大将と姫宮が結ばれることをおもしろがり、認めているのである。

また、（注3）によれば、「帝は藤壺女御の姿を恋路大将が見るようにしむけた」とある。これは右で見た「いかで心動かさするわざせん」と思った帝が図ったことなのだろうが、少なくとも本文からわかる範囲では、大将は藤壺女御に対してさほどの反応を見せてはいない。姫宮に藤壺女御の「かの雪の朝の御面影」（本文五行目）があるとか、藤壺女御を見ると「ありつる御面影ふと思ひ出でらるるも、なつかしき（さきほどの姫宮の御姿がふと思い出されるのも、心ひかれる気持ちがする）」など、姫宮を思う気持ちを述べる時に引き合いに出される程度であり、藤壺女御のほうへは「殊に見やり奉らぬ（格別目をやり申し上げない）」のである。よって、④の冒頭「藤壺女御への恋を奥に秘めて沈んでいた心・女御への裏切りを我ながら情けないと思っている」と、⑤の冒頭「藤壺女御への恋に浮かれていた心・ますますその母である女御を一途に思い詰めるようになってしまった・女御の気を引くために」は誤りである。

めったに心を動かすことのなかった大将が、姫宮を見そめ、その気を引こうとして、豪華な雛屋を作ることに心を砕くようになった、という本文全体の流れがなんとなくでも読解できていれば、正解できるはずの問題である。

正解　27　①　（8点）

問6　標準　本文との内容合致を問う問題。

正解となる⑤は、本文最終段落の「我が御殿の～変はらず写し作らせ給ふ」に相当し、誤りがない。

①は「帝は中宮のところにお泊まりになりましたが、今朝こちらにお戻りになってから」が誤り。本文冒頭の「今宵は中宮の御宿直なりけるが、下りさせ給ひけるままに」では、「中宮へ」ではなく「中宮の」となっているから、「宿直（とのゐ）」の主体は「中宮」と考えるべきである。そもそも「宿直」とは、「（貴人のもとへ）宿泊して伺候すること」であるから、帝が中宮に「宿直」するというのはおかしい。右に引いた冒頭部分は「昨夜は中宮がお泊まりだったが、中宮がお帰りになるとすぐに」と訳すべき部分である。

②は「苔や露も必要になり、見苦しくなってしまうからやめなさい」が誤り。二宮は「苔や露も入れさせ給はば、雛のため、いかにうつくしからん（苔や露もお入れになったら、人形のために、どれほど可愛らしいことだろう）」（本文九行目）と言って、より良い雛屋の飾り方を姫宮に勧めているのであって、姫宮の言葉を「打ち消し」ているわけではないのである。

③は「虫を入れたために濡れてしまっても、たいして苦にしていないようにふるまっていた」が誤り。第三段落の最初に、雛屋を作るための細工師を大将が奈良から呼び集めたことが書かれているが、そこに「虫も雛も一つにて濡れて苦しみあるまじきさまにしつらはせ給へる」とあるのは「虫も人形も一緒にして（露に）濡れても問題がないように整えさせなさっている」という意味である。そもそも、虫を雛屋に入れたいと言い出したのは姫宮であり、そこへ苔や露も入れたらよかろうと提案したのは二宮である。その望み通りに大将は雛屋を作ろうとしているのであるから、「虫を入れ」たり「濡れてしまっ」たりすることを大将が「苦に」するはずはない。

④は「誰にあげればよいのか思いあぐねて、最終的には大納言の君に相談し」が誤り。第三段落の前半で大将は「思ひかけず人の賜びて侍るを、参るべき御方もやとてなん。（思いがけずある人が下さっていましたのを、差し上げるのによいお方もあるだろうかと思って）」と言って雛屋を藤壺女御へ献上しているが、大将が虫を入れた雛屋を用意したのは姫宮がそのような雛屋を所望していることを知って（本文第一段落）のことであるから、「差し上げるのによいお方もあるだろうかと思って」と言っているのは、「あなたの娘こそが『差し上げるのによいお方』である。渡してほしい」という気持ちで言っているのであって、「誰にあげればよいのか思いあぐね」ていたというわけではない。また、本文の同じ箇所に、雛屋を献上する際に「大納言の君」と上書き（宛名書き）したとはあるが、「大納言の君に相談し」た旨はどこにも書かれていない。

問1のような現代語訳問題などでは当然のことだが、そうではない設問であっても、本文表現に即して答を導き出すことが問題を解く基本である。合致問題においてもそれは当然であり、緻密な本文表現と照合が正解にたどり着く唯一の方法であると考えてほしい。

正解　28　⑤　（6点）

第4問　漢文　黄子雲『野鴻詩的』

［書き下し文］

世の学ぶ者、動もすれば杜詩を以て難解と為し、肯へて一たびも目を過さず。咿哦する所の者は、宋・明に非ざれば即ち晩唐なり。詎ぞ知らんや、薫染すること既に深く、後杜に進まんと欲すと雖も、也た得べきかを。

説く者謂ふ、学ぶ者は当に高きに登るに卑きよりすべくして、躐等すべからずと。此の言是に近くして非なるは、道に同じからざる有るが故なり。如し泰山に上るに梁父よりして登らば、此れを之れ卑きよりすと謂ふ。若し鳧・繹を歴て日観の巓に造らんと冀はば、之を跡ぬること愈労しく、之を去ること愈遠し。

然らば則ち杜を学ぶ者は当に如何なるべくんば而ち可なるか。余曰はく、杜の五律の中浅近にして易明なる者、「天河」「蛍火」「初月」「鷹を画く」「端午に衣を賜る」の詠物等の篇のごときを、反復尋繹せば、心目自ら明らかにして、門戸にて其の望見せざるを患はざるなり。此よりして進まば、階を歴て堂に升ること、殆ど期有らん。

［通　釈］

近ごろの、学問・文芸を修めようとする人たちは、とかく杜甫の詩を難解と考えて、まったく目を通そうとせず、吟詠する詩は、宋代・明代のものでなければ、せいぜい晩唐のものである。（詩を学ぶ者は）宋代・明代の詩や晩唐の詩の影響をすでに色濃く受けてしまっているので、のちに杜詩を学ぼうとしても、もはやできなくなっていることを知らないのである。

（ある）論者は（こう）言う、詩を学ぼうとする者は、高い山に登るには、低いところから始めるべきであり、段階を飛び越えようとしてはいけないと。このことばが正しいことを言っているようで間違っているのは、高い山に登る道にも（つまり、同じ低いところから登ると言っても）違う登り方があるからである。（たとえば）もし泰山に登ろうとして（その泰山の）ふもとの梁父山から登るのならば、これを、（高い山に登るには）低いところからと言ってよいのである。（しかし）もし（泰山に登ろうとするにしても）はるか南の鳧山や繹山から始めて（泰山の）日観峰の頂上までたどりつこうと考えたとしたら、その道を探し求めることはとんでもない苦労で、遠ざかるばかりで（とてもたどりつけないで）あろう。

それならば、杜詩を学ぶ者はいったいどのようであればいいのであろうか。私は（こう）言おう、（それは）杜甫の五言律詩のうちの、あまり（内容が）深くなく身近な（題材で）やさしくわかりやすいもの、（たとえば）「天河（天の川）」「蛍火（蛍の光）」「初月（新月）」「鷹を画く」「端午に衣を賜る」などの詠物詩のような作品を繰り返し読んで探求すれば、（いずれ杜詩の高みを理解する）心眼も自然と開けてくるので、入口のところで（杜詩は）難解で

たどりつけないと嘆くことはないのである。こうして（高い目標をもってそれそのものの低いところから）学び進めて行けば、着実に段階をふんで上達し、いずれすぐれた境地に達するときがくるであろう。

［解　説］

問1　(1)標準　(2)基本　語句の意味の問題。

問1は、今年度も語の意味の問題であった。ただ、昨年度は「寧歳」「相類（相類す）」という二字の語句だったものが、今年度は「動（ややもすれば）」「是」という一字の語になった。

(1)「動」は「モスレバ」という送りがながあることによって「ややもすれば」と読むことがわかるかという、読みの問題の要素もある。「ややもすれば」と読めれば、辞書的には「ともすれば・どうかすると」というような語感であるから、④の「とかく」であることがわかる。読み方がわからなければ、文脈に選択肢をあてはめてどれが適当かを考えてみるしかないが、その場合、⑤の「まれに」などは間違いやすいであろう。しかし、このあとの、「杜詩を以て難解と為し、肯へて一たびも目を過さ」ない者が「まれ」でなく、「世の学ぶ者」の大多数であることに対する筆者の叙述を考えれば、⑤は選べないはずである。

(2)「是」は、「これ」と読むと①の「このこと」にとびつきそうになるが、ここは、直前の「説く者」の「此の言」に対して、「是に近くして非」だと言っている文脈に着眼しなければならない。つまり、「是」は「非」と対置されているのであるから、「非（まちがっていること）」に対して、⑤「正しいこと」の意味で用いられているのである。読み方は「これ」ではなく「ぜ」である。

正解　(1)　29　④　(2)　30　⑤　（各4点）

問2　やや難　訓点のある傍線部の解釈の問題。

返り点も送りがなもついている解釈の問題ではあるが、選択肢の判断はやや面倒な問題だったかもしれない。

「詎」は見なれない字であるが、「なんゾ」とふりがながついているのだから、「何・胡・曷・奚」などと同じと考えればよい。この傍線部は「詎ぞ知らんや…」と読んでいるが、この「どうして知っているだろうか」が、以下の内容全体について「いや、知らないのだ」と言っていることがポイントで、この反語形に着眼できれば、選択肢の末尾が「知らないのだ」になっている、②・③・⑤が正しいのではないかと見ることができるのである。つまり、この傍線部は「詎知薫染既深、後雖欲進乎杜、也可得乎」と返り点を施して、「詎ぞ薫染すること既に深く、後杜に進まんと欲すと雖も、也た得べきかを知らんや」と読んでも同じなのである。

全体が反語であることと、もう一つのポイントは「**雖（いへども）**」である。「雖」は、**逆接仮定条件**（たとえ…であっても。…としても）ないしは逆接確定条件（…だけれども。…だが）を表す返読文字である。ここは、「後に杜詩を学ぼうとしても」と逆接仮定条件に訳してある④・⑤が適切である。

全体の反語のとらえ方が正しいのは②・③・⑤、「雖」の訳し方が正しいのは④・⑤であるから、どちらのポイントも正しいのは⑤ということになる。解釈の問題では、全体をまず自分なりに訳してみて…というやり方をしがちであるが、**何かポイントになっている句法なり重要語なりがないか**を見つけることが近道になるケースも多い。

ちなみに、さきほど上下点をつけ加えて読んだ形の直訳は、「どうして（宋代・明代の詩や晩唐の詩の）影響をすでに深く受けてしまっていて、のちに杜詩に進もうとしても、またできるかどうかを知っているであろうか、いや知らないのである」のようになる。

正解　31　⑤　（7点）

問3　**標準　比喩の対象の判断の問題。［新傾向］**

比喩の対象の判断を問う問題が新傾向ということではない。設問に表を用いてある形が非常に珍しく、一見新傾向に見えるということである。設問文の中で、「Ⅰ『杜詩』、Ⅱ『杜詩の中の「…」「…」…などの作品』、Ⅲ『宋・明・晩唐の詩』それぞれの対象として挙げられているものの組合せとして最も適当なものを…」という形にしても同じことで、設問文が長くなるので表の形にしたのであろう。

さて、選択肢は、「泰山」と「梁父」と「鳧・繹」の組合せでできているのであるが、この三つにはすべて（注）がついている。

8　泰山――山東省にある名山。

9　梁父――泰山の麓（ふもと）にある低い山。

10　鳧・繹――鳧山と繹山。ともに泰山から見て遥（はる）か南にある低い山。

Ⅰの「**杜詩**」が、「世に学ぶ者」が「動（やや）もすれば難解」と考えて敬遠し、のちに「進まんと欲」してもなかなか進めなくなる「高き」存在であることは、比較的わかりやすいと思われる。とすれば、Ⅰは「泰山」であろう。この段階で選択肢は③・⑤に絞られる。

Ⅱの「**杜詩の中の『天河』『蛍火』『初月』『画鷹』『端午賜衣』などの作品**」は、そもそも杜甫の作品である。第三段落で筆者は、杜詩を学ぶ者はこれらの杜甫自身の五言律詩から始めればよいと言っている。これは、第二段落の「如し泰山に上るに梁父よりして登らば、此れを之れ卑きよりすと謂ふ」と言っていることと相応するので、Ⅱは泰山そのものの麓の「梁父」である。ここで正解は③と決められる。

Ⅲの「**宋・明・晩唐の詩**」（Ⅱ「**杜詩**」**ではないもの**）は「鳧・繹」ということになるが、同じ「低い山」とはいえ、「泰山の麓」でなく「遥か南に

ある」つまり、泰山とはまったく別の山ということであるから、これで適当といえる。

正解　32　③　（7点）

問4　標準　傍線部の書き下し文と解釈の組合せの問題。

この組合せ問題は、返り点の付け方と書き下し文（読み方）の組合せ問題とともに、センター漢文ではよく出る形である。(i)の書き下し文と(ii)の解釈は、それぞれ単独で正否を考えることもできるが、同じ傍線部である以上、当然(i)と(ii)の正解が合致しなければならないのだから、それをチェックすることで、スピーディーに両方の正解を絞ることができる。

(i)の書き下し文であるが、「然らば則ち杜を学ぶ者は」までは、①～⑤までの全選択肢共通している。ということは、「当二何如一而可」の五文字に何かポイントがないかということになる。まず**「当」**である。これは、「あたる」と読む可能性はもちろんあるが、質問されていれば当然**再読文字「まさに…べし」**の可能性が高い。②・③・④が「当に」と読んでいるが、「当」には左下に返り点があるのに、②は「べし」と再読していないので消去。③・④は「当に…べくんば」と読んでいる。もう一つのポイントは**「何如」**である。これは「いかん」「いかんぞ（「何ぞ」と同じ疑問詞としての用法）」「いかなる…」などと読むが、③のように「何れのごとく」と読むことはない。それと、「何れのごとくに…」ともしかりに読んだとしても、文末が「可なり」という断定で終るのでは意味がおかしい。「どのようにすれば…」と問う以上、その場合でもやはり、④と同じように、文末が疑問の形にならなければならない。(i)の正解は④である。

(i)の正解が④だとわかれば、その読み方どおり自分で訳してみて、(ii)の中から合致するものを見つければよいが、(ii)については、冒頭の**「然らば則ち」**の訳し方ですぐに①か③であることがわかるようになっている。「然らば則ち」は「以上のようだとすると…だ」という順接を表す語で、「そうであるならば・それならば」のように訳す。③は「どのようなときに」や「対処できる」が、(i)の④の読み方どおりの解釈としてはそぐわない。(ii)の正解は①である。

正解　(i)　33　④　(ii)　34　①　（各6点）

問5　標準　引用詩の内容説明と本文の主旨判別の問題。［新傾向］

問題文中に漢詩が引用されているという形は近年では二〇〇七年度にもあったりしたが、設問部分に漢詩が示されて、その内容について問うという形は過去に例がない新しい形である。ただ、詩の内容については、各句の下段に現代語訳がつけられているので、それが十分な参考になっており、もう一点は「本文の主旨」を問うているのであるから、本文全体で筆者が言っていることを読みとれればよいということである。

筆者は、杜甫の詩を学ぶ第一段階として、「杜の五律の中、浅近にして易明なる者」を選んで学ぶことを勧め、その例として、この「蛍火」のような「詠物」詩をあげているのである。

①は、詩の解説としても、「蛍が人間の幸福になにも寄与しないことを批判的に描写」「作者の自らへの戒めとする」がそぐわないし、本文の主旨としても、「表現意図が明確に示された詩を学ぶ」がそぐわない。

②も、詩の解説として、「修辞を凝らして描写」「作者のあこがれも表現されている」がそぐわず、本文の主旨としても、「すぐれた技巧が生きている詩を学ぶ」がそぐわない。

③も、詩の解説として、「蛍が生まれた所に戻ろうとしない無情なさまを客観的に描写」「作者の望郷の思いが図らずも浮き彫りにされている」がそぐわない。詩そのものは「叙情性を備え」ていると言えるが、それを学ぶことを勧めている点は、本文の主旨と合致しない。

④も、詩の解説として、「蛍のか弱い生態を様々な角度から同情的に描写」「作者自身の消極的な人生態度も自然に吐露されている」がそぐわないし、本文の主旨としても、「複雑な情緒を表現している詩を学ぶ」がそぐわない。

⑤は、「蛍の寄る辺なくさまようさまを多様な角度から描写」も、「作者自身の旅人としての姿も投影されている」も、詩の内容に合致しており、「身近な題材を用いつつ平易でかつ内容に奥行きのある詩を学ぶ」が、筆者の言っている主旨に合致している。

正解　35　⑤　（8点）

問6　やや難　筆者の主張を判断する問題。

どの選択肢も、末尾の「いずれすぐれた境地に達するときがくるのだ」は共通している。これは、傍線部Cでいえば「堂に升ること、殆んど期有らん」に相応しているであろう。

また、「階を歴て堂に升る」は、段階を経て上達してゆくことを言っているから、①でいえば「下から一歩ずつ着実に登ることが大切」、③では「初歩から一歩ずつ着実に始めれば順調に上達」、④では「低いところから着実に進み始めてこそ順調に上達」、⑤は「基礎的でわかりやすい内容のものから始めれば順調に上達」などが相応している。②には相応する部分がない。

あとは「此よりして進まば」の内容を本文全体の筆者の主張もふまえて考察し、かつ、各選択肢のキズの有無をチェックしてみよう。

①は「高度な作品を避けて始めたとしても順調に上達」がキズ。これでは始め方が宋・明の詩でも晩唐の詩でも何でもよいことになり、杜詩の中の低いところからスタートという主張にそぐわなくなる。

②は「人々から注目されている分野を選んで着実に始めれば」がキズ。そのようなことは、本文中のどこにも書かれていない。

③は「山にもさまざまな高さのものがあるように」「どれを対象として選択してもよく」がキズ。①と同じく、何でもよいのでは間違いである。

⑤は「なるべく安全な道を選ぶべき」がキズ。「安全な道」ではなく、その山のふもとの低いところから、である。

④が正解。杜詩を学ぼうとするには、入口のところで難解と決めつけて敬遠したりせず、初めから杜詩という「高い目標」を「対象」として「選ぶ」ことが「重要であって」、その杜詩そのものの「低いところ（五言律詩の中の詠物詩など）から着実に進み始め」ることが大切だと、筆者は主張している。「此よりして進まば」が言いたいことはその点である。

正解　36　④　（8点）